

グリーンちゃんと共に

下長中学校 一年 上 咲雪

数年ぶりに、地域で夏休み中のラジオ体操が行われることになった。小学一年生の妹に付き添い私も公園で活動し、終わると自宅の庭に置いてある妹の朝顔と一緒に水やりをする。何日か繰り返してはいて気付いたことがある。歩道と庭では、暑さが違うのだ。歩道のアスファルトや庭のコンクリートの上では、靴を履いているのに足元から熱気もわもわと感じるが、庭の中では息がしやすいというか、空気が軽くなつたというか、一定の過ごしやすさを感じる。一步、二歩の距離で体感する違いが不思議で、母に話してみた。

「今年ママが草むしりをできていないから、グリーンちゃんのおかげじゃないかな？」

なるほど！答えは目に見えていた風景だった。しかし当たり前すぎて気がつかなかった。いつもは母が庭の手入れをしていたが、今年は特に暑い日が多く、日光アレルギーの症状も出てしまったため、庭仕事は控えていたそうだ。だから今、庭は緑のじゅうたんのようになっている。我が家では、家の中の観葉植物も庭の植物も、みんなグリーンちゃんと呼んでお世話をしているから、私は思わず「グリーンちゃんありがとう」と言ってしまった。

私が体験した現象は、他の人も同じように感じることができるのかと疑問に思い、表面温度

計で調べてみたら、面白い結果になった。外気温が三十五度の日、庭のコンクリートは四十七度、アスファルトは五十三度、庭の植物の上は三十六度だった。植物は水やりをしていない、直射日光の当たるところでもほぼ外気温と同じで、最も熱かったアスファルトとは約二十度も差がついていた。数字でみると明らか違いに「やっばり」と嬉しく感じた。そして新しい視点で観察することもできた。アスファルトは黒色だから熱を蓄えやすく高温になる。反対に植物は熱を蓄えることができず、周囲の温度はほぼ上がらない。

この話を母としていたら、「うちの庭もSDGsだね」と笑っていた。詳しく聞いてみたら、SDGsの中の環境に関わる活動のうち、緑化活動というものがある。環境の改善を図り、その空間や人の心に癒しを与えるそうだ。本当にその通りで、植物があるだけでマイナス二十度の効果があると分かった今、自分の家の周囲だけではなく、通学路、学校、教室、身近な全ての空間に緑を増やしたくなった。

夏は暑いものである。だが、限度もあると地球に言いたい。東北地方、海の町でも三十五度を超える猛暑日が増え、中学生になった私は登校に四十分程度かかり、朝の元気がそれだけで奪われてしまう。自分の席で一息つけると思っても、教室全体の気温が高く、扇風機で送られてくるのはサウナのような熱風だけ。水筒に入れている氷たっぶりの麦茶だけが救いだ。

改めて考えてみると、通学路の植物は整地や建築の影響で減ることはあるが、増える所は見ることがない。公園の木陰のように、太陽の光を遮り、体も心も休まる場所がいくつもあるだけで、歩く力もわいてくると思う。きつと皆も想像できるだろう。目を閉じて軽くふつと息を吐き、思いきり鼻から空気を吸い込む。たくさん葉を茂らせた木を見上げながら、土の湿った香りと木独特の甘い香り。それらで胸がいっぱい満たされたら、ほっとする。その瞬間に風が吹いたら最高だ。額の汗も熱のこもった首筋もすつと冷やし、木の枝や葉をザワザワと揺らすと、体や耳までも涼しくしてくれる。緑に囲まれている自分を心で描いてみたら、その光景があまりにも素敵でまぶしく思え、気が付いたら笑みがこぼれていた。

しかし、私の住む地域が、日本が、世界が今より緑に包まれたなら、人も自然も過ごしやすくなるだろうか。温暖化が止まり、海水の上昇もなく、本当の意味で人と自然は共存できるのだろうか。私は地球に言いたい。緑が減って苦しかったんだね、ごめんね。人にとつての便利を追求することは、地球の不便なのかなと思う。私たちが全ての便利を捨てることは難しいが、地球に寄り添い共に歩む未来もあるのではないだろうか。

今、私にできる緑化を考えた時、それもまた答えは近くにあった。家のグリーンちゃんたちを大切に育てること。ただ水やりをするだけで

はない。植物は人の言葉を理解できると聞いた
ころから「葉っぱが大きくなったね」「葉っぱの
赤ちゃんが増えたね」などと、語りかけつつ世
話をしている。本当に言葉が通じていなくても
穏やかな気持ちになるので続けたいと思っ
ている。

地球規模で緑化が実現すると省エネや環境
改善に効果があり、SDGs^⑬の「気候変動に
具体的な対策を」に沿えるはずだ。だが、まず
は身近な所から。いつでも答えはすぐそばにあ
る。グリーンちゃんと共に。